

最近のトピックス

## 「石灰化歯原性嚢胞」の問題点

新潟大学歯学部口腔病理学教室

福島 祥 紘

石灰化歯原性嚢胞 Calcifying Odontogenic Cyst (COC) は、1962年アメリカの病理学者 Gorlin 教授ら<sup>1)</sup>によって新しく命名された顎骨内外の嚢胞性疾患で、組織学的には Ghost Cell と石灰化を特徴とすると言われている。

極めて特徴的な病理組織像であるにも拘らず、本病変の性状・名称・鑑別診断など、まことに基本的なところでの議論が絶えないのである。何故であろうか。

2点のみについて挙げてみよう。

その第一は、外国例にのみ報告されている口腔軟組織におこっている症例の存在である。これは Gorlin 教授自らの最初の報告にもすでに入っている(5例/11例)が、この軟組織病変が約22%(18/82例:外国症例のみ)も存在するのである。しかも、この中には Epulis 様に口腔へ突出しているものまで、含まれている。確かに歯肉嚢胞という軟組織に発生する歯原性嚢胞の存在も知られてはいるけれども、全歯原性嚢胞の中では1%のレベルまで到底達していないだろうと思われる。本病理学教室生検例は4,000例弱であるが、歯肉嚢胞の診断は未だない。ということは、つまり COC という嚢胞性と考えられている疾患に、軟組織病変が多すぎるという事は、COC が嚢胞ではなくてエナメル上皮腫の一型なのか、軟組織病変は実は COC でないのか(実際、本邦例には軟組織例は一例もない)という議論をひきおこすことになる。この COC は、腫瘍なのか嚢胞なのかという議論は、未だけりのついていない問題である。

しかし、考えてみると、Gorlin 教授が最初に COC を規定した時に、彼は COC を皮膚における石灰化上皮腫 Calcifying epithelioma of Malherbe と analogue としたところに、論争の火種はあったように思われる。つまり嚢胞という名称を与えながら、一方で皮膚腫瘍との類似性に言及したわけだから。

この議論は、COC は腫瘍であるという意見の方が若干優勢ではあるものの、新たに COC の病変としての独立性を疑う意見<sup>2)</sup>も出てきたというのが現段階であって、未だ混沌としている。これについての著者の意見は、別に稿を改めて書くつもりである。

第2の問題というのは、本邦内における COC をめぐるとの議論である。前述のように、本邦例44例は、全例顎

骨内にある明らかな嚢胞性疾患ばかりであって、軟組織のエナメル上皮腫との鑑別に悩むような議論には一切出会うことはない。これは診断の問題かもしれないが、内外の症例にわずかではあるが「ずれ」を感じるのは、著者ばかりではないと思う。

その代り、本邦例でよく問題になるのは、歯牙腫(特に complex odontoma)との合併例の場合である。そこでは歯牙腫が先か、嚢胞が先かという議論が、COC が腫瘍か嚢胞かという議論にかわって行なわれている。著者がおかしいと思うのは、「本嚢胞と歯牙腫の合併について、嚢胞壁の裏装上皮と結合織が互いに誘導しあい、分化が進んで歯牙硬組織を形成する能力を持つようになる」と考えられるから「この嚢胞壁上皮と結合織上皮との互いの誘導によって complex odontoma の形成に至ると考えるのは極めて妥当であって、従って COC は腫瘍性をもつ嚢胞である。<sup>3)</sup>」という考え方である。色々な病理の研究者まで賛成しているが、どんなものだろうか。

嚢胞を持たない complex odontoma は、いくらかも存在するし、ghost cell や異常な石灰化(異形成エナメル他)を形成する complex odontoma の存在も知られている。又 odontoma において歯牙完成後退縮エナメル上皮が増殖をはじめめる例も少なくない。odontoma と合併するときには、どの部分が odontoma で、どれが COC かの明確な判定なしに、上記のような一方向への推論は、危険というよりむしろ誤りではないかと思われる。

ちなみに、彼らの推論の根拠となっている Abrams ら(1968<sup>4)</sup>)は、COC は歯牙腫と関係ないものに、又歯牙腫が合併しても嚢胞形成の明らかなもののみに限るべきであって、単に Ghost cell や石灰化をもつ odontoma は、COC ではなくて odontoma とすべきであると言っている。

著者は第1・第2の問題から推察されるような、日本の内外における COC のとらえ方の差の存在を強く感じている。

- 1) R. J. Gorlin, et al: Oral Surg. 15: 1235-1243, 1962.
- 2) F. Praetorius: Symposium on Maxillo-Facial Bone Pathology (1974), Brussel.
- 3) 平林ら: 広歯誌, 9: 70-73, 1977.
- 4) A. M. Abrams, et al: Oral Surg. 25: 594-606, 1968.